令和６年度　南阿蘇中学校　学校だより

夢湧き、夢に夢中

第　８号

令和　６年　７月22日　文責：大谷

セーヌ川の流れのように

日本時間の七月二七日午前二時三〇分、フランスの首都パリを流れるセーヌ川では、世界中から集った約一万人のアスリートたちが九四隻の船に乗り、約六kmにわたってパレードするイベントがあるそうだ。聞くところによると、史上初めてのことだとか。さて、このイベントとは？

このイベントには、わたしたちの郷土、熊本から多くのアスリートが出場しており、同郷のひとりとしては、睡眠不足は必至だ。特にわたしが住んでいる大津町からは、なんと二人もこの大舞台に挑んでいるのだから、その熱量は半端ない。

ひとりは、男子マラソン日本代表の赤崎　暁選手である。赤崎選手は、大津中学校卒業で在学中は男子バレーボール部に所属していた。当時は、秋に中体連の陸上大会が行われていたため部活動の垣根を越えて学校総体で陸上の練習を行っていた。その中で、赤崎選手も長距離走とバレーボールの”二刀流“に取り組んでいたそうだ。当時のバレーボール部顧問の先生に話を聞いたところ、バレーボールにも陸上にも一切妥協することなく一途に向き合っていたそうで、進学した開新高校や拓殖大学では、苦しみながらも努力を諦めなかったことで陸上の才が開花し、今回の代表を見事射止めた。

代表内定後も大津町に帰ってきては、町内の競技場で子供たちと走っている光景をよく目にした。失礼ながら、一見しただけでは日本代表とは気づかないような青年である。しかし、瞳の奥には秘めた情熱や人間性そのものが、まるで炎のように燃えていて圧倒される。そんな赤崎選手らしい粘り強い走りを期待したい。

一方、その赤崎選手の同校の一つ先輩で、当時からバレーボール界で注目されている選手がいた。女子バレーボール日本代表キャプテンの古賀紗理那選手が、もう一人である。中学当時の試合を観戦したことがある。一人だけ突出していた。古賀選手にボールが上がれば、得点は確定だった。全国でもトップレベルだと思った。当時、顧問をされていた先生も常に口にされていた。「紗理那とともに日本一」と。

練習量は凄みを増した。特に古賀選手につなぐために、徹底してレシーブを強化したと聞く。そんな「つなぐ」精神が、古賀選手を支えてきた。そして、どんなに絶体絶命のピンチの場面でも、決して諦めることなく自身を奮い立たせてきたのだろうと思う。このことを裏付けるかのように、ここ最近の全日本の試合で「頼れるキャプテンの一本」という実況をよく耳にするようになった。ここぞという場面で決めきれる強いメンタリティこそが、まさに古賀選手の真骨頂である。そんなわたしたちの誇れる絶対的エースは、「どこか」で生み出されたのではなく、「ここ（熊本）で」育まれたのである。古賀選手は、今大会を最後に現役引退を表明している。あの胸がすくようなスパイクが観られるのもあとわずかである。ぜひ古賀選手の一挙手一投足を目に焼き付けておきたい。

美空ひばりさんの歌「川の流れのように」の一節に、こんな歌詞がある。

”知らず知らず　歩いてきた　細く長いこの道
振り返れば　遥か遠く　故郷（ふるさと）が見える“

セーヌ川の流れに身を任せながら華々しくパレードする選手たちが、そこに至るまでの時の流れを振り返ったとき、故郷の仲間であるわたしたちの声が少しでも届くよう応援したいと思う。ただし、直接届けることは難しそうなので、せめてわたしも、何かに夢中になれる夏にしようと思う。

■入学式に始まり体育大会や1年生の集団宿泊教室、さらには中体連夏季大会及び引き渡し訓練等々、1学期は多くの諸行事にご協力いただきありがとうございました。心より御礼申し上げます。明日から長い夏休みに入りますが、例年にない猛暑との予報もありますので、どうかご自愛ください。